

『美術資料』(2012年改訂版)の編集に当たって(その2)

教本・図書資料委員会

研究誌「美」188号では、2012年4月に発刊した改訂版『美術資料』の編集作業のまとめとして、

I 編集の概要と今後の課題

II 編集意図と巻頭ページ

について報告させていただきました。今号では、それに引き続き、

III 日本美術関係の新設テーマについて

IV 改訂版『美術資料』に対応するワークシートの事例

琳派：時代を超える「かたち」の魅力 ①～③

報告させていただきます。

なお、重ねて現場の先生方には、ぜひ、『美術資料』に対するご意見・ご感想をお寄せいただけますよう、また、授業で活用していただいていた新たなアイディア・生徒達の感想などもお聞かせ願えましたら、今後の参考にさせていただきたいと存じます。

III 日本美術関係の新設テーマについて

田島 達也

1. 新設テーマ

〈琳派 時代を超える「かたち」の魅力〉

もともと宗達や光琳の作品は、美術の教科書でも定番で『美術資料』でもいくつかは取り上げてきた。今回は改めて1つの項目として琳派を加えた。琳派とは、江戸時代の日本に興った美術の流派で近代美術にも大きな影響を

与えた。代表的な画家である俵屋宗達、尾形光琳、酒井抱一の間には師承関係はなく、狩野派のような血縁でつながった画系とは違い、近代以降にその表現の特質から1つの流派として認識されるようになった。大和絵など古典的なテーマを装飾性豊かに大胆に展

開する。そして直接・間接に工芸と深く関わっている点が大きな特徴である。いわゆる日本的なデザイン、と聞いてまず思い浮かべるのが琳派だろう。

新たに追加した琳派の項目には、時代を超える「かたち」の魅力、というタイトルを設定した。宗達や光琳そのものの紹介というよりも、琳派的な「かたち」の魅力がどのように展開しているかわかるようにということを意識している。まずページの中央に光琳の《紅白梅図屏風》を大きく配置し、向かい合う2本の梅、中央の水流の形がよく見えるようにした。キャプションでは、《風神雷神》との関連を述べ、宗達との関わりに触れる。次に光琳に関係する工芸品として、光琳デザインの蒔絵箱、光琳模様の小袖、尾形乾山の龍田川文の皿を提示。蒔絵箱は下絵と一緒に掲載して、光琳の梅の形がどのように立方体の立体に展開しているのかわかるように工夫した。琳派の平面をうまく利用した構図は、2次元上に3次元のイリュージョンを生み出す絵画とは根本的に異なる。それゆえに立体的な表面を持つ工芸品との親和性が高い。絵画が工芸的な表現を取り入れている面と、工芸が絵画の豊かな表現力を取り入れている面があり、両者が相まって優れた装飾芸術が生み出されている。絵画と装飾が区別されてきた西洋の伝統にはない、日本美術の重要な特質となっている。

そうした伝統の現代に生きる形とし

て、和菓子を紹介したのも今回の大きな特徴である。京都の和菓子店長生堂さんに協力を依頼し、和菓子の製造工程、道具類などを取材させていただいた。掲載の菓子は店主が光琳の梅をイメージして作ったという紅白梅の生菓子（こなし製）。いわゆる「光琳梅」と呼ばれる文様化された梅に近い形になっている。それ自体、琳派の伝統と言えるが、作者である長生堂店主は、光琳が下鴨神社の梅を見て《紅白梅図屏風》描いたという言い伝えをもとに、梅の季節にスケッチに行ったという。そうしたエピソードを加えることで、単に形を見て真似するだけではなく、形を生かすためには自然に対する深い理解が必要なこと、それが琳派のこころの継承になるということ、文章で補足している。

和菓子というのは、学習指導要領の改訂に伴い2012年度版の各社の教科書でも大きく取り上げられている。ただ実際に学校現場で和菓子を取り入れようとしても、和菓子に対する理解がなければ、新しい粘土遊びの1つのようなとらえ方になりかねない。和菓子の意匠のキモとは何か。それは、モチーフとなる自然その他をよく知り、その上で要素を切り詰め、最小限の表現で最大限豊かなイメージを提供するところにある。それすなわち琳派のかたちであり、こころである。よって、和菓子の実践を行う先生にはぜひこの項目を利用していただきたい。

2. 新設テーマ

〈洋画と日本画 西洋との出会い〉

2、30年前の美術の教科書や資料集を見ていて、近代の洋画や日本画が「現代美術」の位置付けの中にあることに気が付き、はっとした。近年の傾向は、日本の伝統重視で江戸時代以前の絵画は多くとりあげられる一方、現代の美術として紹介するものはコンセプチュアルなものに傾いている。間に挟まる日本の近代美術は、古美術とも現代美術とも呼べない領域にあり、登場の機会が漸減している。しかし、明治・大正・昭和の洋画や日本画は、日本美術史の中でも活況を示した時期であり、優れた作品が非常に多い。この時代に対する認識がそのまま薄くなっていくのはまずいのではないか。今回の『美術資料』の改訂の際に、洋画と日本画で1つの項目を立てたのは、こんな認識があったからである。

この新テーマでは、日本の近代美術というものを1つの領域として位置付けることを意図した。西洋文明に合流した日本はさまざまな分野において、伝統と新文化との相克の中で苦闘した。そうした体験が現在の日本を作り出している。もともと『美術資料』の中では「ジャポニズム」の項目があり、日本美術が西洋美術に与えた影響を紹介している。しかし、それとは比較にならないほどの大きなインパクトが、西洋美術を取り入れた近代の日本にはあったのであり、こちらの方も紹介しないわ

けにはいかない。

一般に、日本画というと、伝統的な日本の絵画と同義に用いられることが多い。しかし実際には「日本画」という言葉も概念は江戸時代以前にはなかった。明治になって西洋画を取り入れた「洋画」が無視できない大きなジャンルとなったことで、大和絵や狩野派や写生画や浮世絵などをひっくるめて「日本画」と呼ぶようになった。江戸時代にも和画という概念はあったが、その対概念は「漢画・唐画」（中国画）であった。中国の新しいスタイルを導入して生まれた南画（文人画）も、近代では「日本画」の方に含まれることになった。そもそも、西洋的な「芸術」・「絵画」の概念を受け入れた時点で、「絵画」のジャンルは1つで良かったはずである。近代以降の西洋絵画は、どんな技法を使おうと自由なのだから。しかし、近代の日本はあえて日本画と洋画の間に壁を作り、展覧会では別ジャンルとして扱われるようにした。それゆえ日本画は、その始まりからずっと、今に至るまで、「日本画とは何か」というアイデンティティーを問いつけることとなった。そうした条件が多様な試みを生み、優れた作品が生み出されていくことにもつながった。

このような議論は、中学校の美術教育ではまだなじみがないだろう。しかし美術史の分野では必須の常識となっており、中学生にも多少なりとも理解してほしい。もちろん今回の『美術資

料』では込み入った説明はしていないが、それぞれの作品に即して、西洋美術とのつながりと、そこから生まれる作品の魅力を解説した。美術とは、作者の個性のみから生まれるのではなく、時代の流れ、社会の動き、美術運動などさまざまな要因があることに多少なりとも興味を持ってもらえたらと思う。以下掲載した作品について、その意図を説明する。

土田麦僊《大原女》は、草上で休息する女性たちを描く。京都の風俗として親しまれた日本的な画題を、繊細な線描と平明な色彩で表現した、大正日本画の名品である。しかし、伝統的な大原女の図は、美人画として立ち姿として描かれるのが通例であり、草原で休息する群像の表現は江戸時代までの日本絵画には見られなかった。そこで解説では、テーマの設定、遠景を取り込んだ構図など、マネ《草上の昼食》などの西洋美術の影響がある事を示唆した。菱田春草《黒き猫》は、掛け軸による鑑賞絵画の伝統に基づき、縦長の画面に猫と柏の木が描かれている。にもかかわらず、どこことなく近代的な感じがする。この絵では地面に落ちた落葉の形を正確に描写し、地面の角度が明示さ

れていることで、江戸時代の絵にはない3次元的な空間が現出していることに気付くよう解説を付した。

一方、洋画の方も、近代の翻訳文化の枠を抜け出すためにさまざまな試みを行った。多くを紹介することはできないので、ここでは日本のモチーフを用いた作品に絞り、定番の高橋由一《鮭》と青木繁《海の幸》を載せた。《鮭》は日本の伝統的な新巻鮭を描く。由一の油彩画では、豆腐を描いた作品などの方が、日本的という意味ではインパクトがあるのだが、ここはやはり有名な作品を優先した。鮭の質感と、壁に映った鮭の影に注意するよう促した。《海の幸》は千葉県漁村で描かれたもので、現実の風景ではないが、日本の土俗的な力のある作品と言える。青木繁は2011年、高橋由一は2012年に大きな回顧展が開かれており、多くの人の目に触れた事は幸いであった。

この新テーマは、日本の近代美術の特質をどのように表現したら中学生に伝えられるかを模索しながら構成したものである。その試みがうまくいっているかどうか、ぜひ現場の声が欲しいところである。

京都市立芸術大学美術学部 准教授

IV 改訂『美術資料』に対応するワークシートの事例

琳派：時代を超える「かたち」の魅力 ①～③

今江 寿子

< 授業の流れ >

①題材名

時代を超える「かたち」の魅力

②対象学年・実施時期

中学校 2年～3年

③ワークシート使用の場面

授業：美術資料 118、119 ページ

<時代を超える「かたち」の魅力>を使用した鑑賞・及び着物の図案制作

④想定した生徒の実態

対話型鑑賞の経験はあるが、発言に関しては積極的な生徒とそうでない生徒の差がある。

また、授業に集中して取り組むことが困難な生徒もいる。そのため、ワークシートの作成にあたっては、次のような点に留意した。

- (1) 授業内に発言しにくい生徒でも、自分の意見を書き込むことで考えを整理できるよう、鑑賞の視点のわかりやすい設問を工夫する。
- (2) 集中力の持続しにくい生徒も制作の場を設けることで、興味・関心が持てるよう、鑑賞と表現を関連付けながら展開できるようにする。授業の展開として、最終的に着物の

図案制作へつなげる構成にした。

⑤学習のねらい

- ・琳派の作品を鑑賞し、その様式・手法に興味・関心を持たせる。
- ・発表を通して、他者の考えや意見にふれ、新たな視点や、価値観を見出させる。
- ・鑑賞を通して学んだことが、表現として、着物の図案制作に活かされるように、既存の物を自分自身で新たに構成し、再構築していく面白さに気付かせる。

⑥評価の観点(鑑賞について)

- ・造形的な面に興味・関心を持ち、鑑賞や簡単な模写をする中で細部の表現に気づき、琳派の独自の様式に興味を持つことができたか。(関心・意欲・態度)
- ・他者の発言から様々なものの見方や感じ方を学び取り、自己の見方を深めることができたか。(鑑賞の能力)
- ・学習の前後において、琳派に対して抱いていたイメージ・気持ちの変容を自分自身で確かめることができたか(鑑賞の能力)
- ・既存のものから発想を得て再構築し

ていく流れを着物の図案を考えると表現し、より具体的に時代を超えて現代も生き続けるかたちの魅力について興味・関心を持つことができたか（関心・意欲・態度）

⑦授業の展開例

週1回3回連続

- ・1時間目 ワークシート①
- ・2時間目 ワークシート②・③
- ・3時間目 ワークシート③

美術資料使用ページ：

118、119、124、125、168、169

○1時間目 ワークシート①

美術資料 P118、119、168

導 入

俵屋宗達「風神雷神図屏風」

美術資料 P168

尾形光琳・酒井抱一の「風神雷神図屏風」（別に準備）

- ・以上の作品をスライドで対話型鑑賞をし、その後、琳派について触れる。師弟関係ではなく、時代を超えた精神的な結びつきに気付かせたい。

鑑 賞

光琳「紅白梅図屏風」

美術資料 P118、P119

- ・ワークシートを用い、部分と全体にわけて、鑑賞する。

模 写

- ・ワークシートの書き込みが終了後に行う。
- ・模写とあるが、スケッチに近い感覚で描かせ、漠然とみていた状況から、描く

意見発表

考えるきっかけをつくり、新たな発見に期待する。

- ・ワークシートの書き込みの時間調整の面も考慮した。

まとめ

- ・様々な意見交流の後、再度、鑑賞後の意見をまとめ、ワークシートに記入する。

○2時間目 ワークシート②

美術資料 P118、119、169

導 入

尾形光琳「燕子花図屏風」

美術資料 P169

（あれば、プロジェクターで大きく映し出す）

- ・上記作品を対話型鑑賞。同じモチーフの繰り返しや、大胆な構成、リズムの面白さに気付かせたい。

鑑 賞

美術資料 P.118

- 1「色絵龍田川文向付」
- 4「蒔絵梅椿若松図重箱」
- 5「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」 P.119
- 36「色絵紅葉図透彫反鉢」 P.169

- ・上記作品を鑑賞し、魅力的なかたちが、身近なものに生かされていることに注目させたい。

画面構成

- ・次回、着物の図案を考えるための準備として、様々な伝統的な図案に触れておく。（雷・雲・草・花・動物などが図案化された着物の例があるとよいかもしれません）

- ・ワークシートにある文様の元になるものに触れる事で、より興味を持つのではないかと思います。(流れ菊、亀甲、麻の葉、網目、よろけ縞、鱗、青海波、市松文様、稲妻、七宝繋ぎ)

次回の予告

- ・今回は、着物の図案を考えることを説明し、案を練ってくるよう伝える。

○2・3時間目 ワークシート③

美術資料使用ページ：

118、119、124、125、168、169

導 入

- ・再度、今まで鑑賞してきた作品に目を通す。美術資料P118、119
時代を超えて、今度は、受け継がれた「かたち」の美しさを、再構築し、着物の図案として生かす。
- ・着物の図案の参考として、美術資料P124、125の伊藤若沖の作品を紹介する。

着物図案制作

- ・着物の図案を考える（鉛筆だけで彩色はしない）。事前に作品に名前(題名)を付けることを話し、テーマを自ら設定してすすめるようにさせる。

【課題の注意点】

- ・ワークシート2で用いた模様を部分で使用してよい。
- ・必ず、動植物が図案に入るようにする。
- ・「余白」の意味(美しさなど)を考えさせる場面をつくりたい。
- ・小紋でなく、江戸時代にみられた、大きな余白を生かしたダイナミックなデザインを考えるようにさせる。
- ・肩のあたりや、裾など、図案のポイントになる場所を意識してつくるようにさせる。

図案の完成

- ・名前、題名を記入する。
- ・3時間通しての感想を記入する。

作成したワークシートを、次頁より掲載します。 大阪市立此花中学校 教諭

REMBRANDT

レンブラント油絵具



特長

全120色。(5号)15ml、(9号)40ml、
(10号)60ml(白のみ)、(11A号)150ml
ホワイト、メタリックカラーが充実。
耐光性は全色最高レベルの+++。

TALENS JAPAN

株式会社 ターレンス ジャパン

東京：〒111-0051 東京都台東区蔵前3-2-0 / Tel. (03) 3863-3406 / Fax. (03) 3863-3407
大阪：〒540-8508 大阪市中央区森ノ宮中央1-6-20 / Tel. (06) 6910-8825 / Fax. (06) 6910-8836

ワークシート

時代を超える「かたち」の魅力 ①

『美術資料』P.118・119 琳派

	年	組	番
氏名			

■ 魅力を発見しよう

琳派とは、俵屋宗達にはじまり、尾形光琳に代表される江戸時代の絵師たちの一つのグループのことです。俵屋宗達と尾形光琳は、生きた時期が異なるため、直接、画法を学んではいませんが、光琳は、宗達の作品に、幼いころから接する環境にあり、後に、宗達の絵の模写もしています。→参考作品：p.168 ㉞「風神雷神図屏風」俵屋宗達

その中で、光琳は宗達の絵に魅力を感じ、その精神が、時代を超えてつながり、様々な作品を生み出す力をつくりだしていったのかもしれませんが。次は、あなたが江戸時代に活躍した光琳の作品と出会い、その魅力を発見していきましょう。あなたの発見が、「かたち」を変えて、次の時代の誰かに何かを残すかもしれませんね。

1. 鑑賞 — 光琳「紅白梅図屏風」との出会い

あなたがP.118 ㉞「紅白梅図屏風」から発見した魅力は何でしょうか。または、感じたことは、何でしょうか。画面を左と右、中心部分にわけて書き出してみましょう。

- ・画面の左側と右側に描かれている「かたち」について、あなたが発見し、感じたことは何ですか。

- ・画面の中心に描かれている「かたち」について、あなたが発見し、感じたことは何ですか。

- ・画面全体から、あなたが発見し、感じたことは何ですか。

2. 模写 — 尾形光琳の P.118 ㉞「紅白梅図屏風」を模写しよう

--	--	--

光琳は俵屋宗達を深く尊敬し、宗達の絵を模写しています。そして、その画法に、絵師独自の発見と解釈を重ねて、再構築していきました。あなたも光琳の絵を模写することで、また新たな発見に出会うかもしれません。

3. 意見交流後のまとめ

時代を超える「かたち」の魅力 ②

『美術資料』P.118・119 琳派

	年	組	番
氏名			

■「かたち」の魅力

当時の生活の中で使われる器や着物にも、琳派の絵師たちの様式は、広がりました。

身近な動植物を題材に描かれたその絵の魅力は、生活の様々な場面を美しく飾りました。自然と共に暮らしてきた当時の日本人々の心が見えてくるかのようです。

(参考作品:P.118 ❶「色絵龍田川文向付」❷「蒔絵梅若松図重箱」/P.119 ❸「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」/P.169 ❹「色絵紅葉図透影反鉢」)

美術資料 P.119 ❸「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」/P.169 ❹「燕子花図屏風」の作品をよくみると、同じモチーフの繰り返しや、その大胆な模様の構成、リズムの面白さに魅了されます。(参考作品:P.119 ❺「小袖 染分紗綾地雲湧取り楓模様」)

■日本の模様



1. 雷・雲・花・草・水・動物…などのモチーフを取り入れたデザインを考えてみよう。

ワークシート

時代を超える「かたち」の魅力 ③

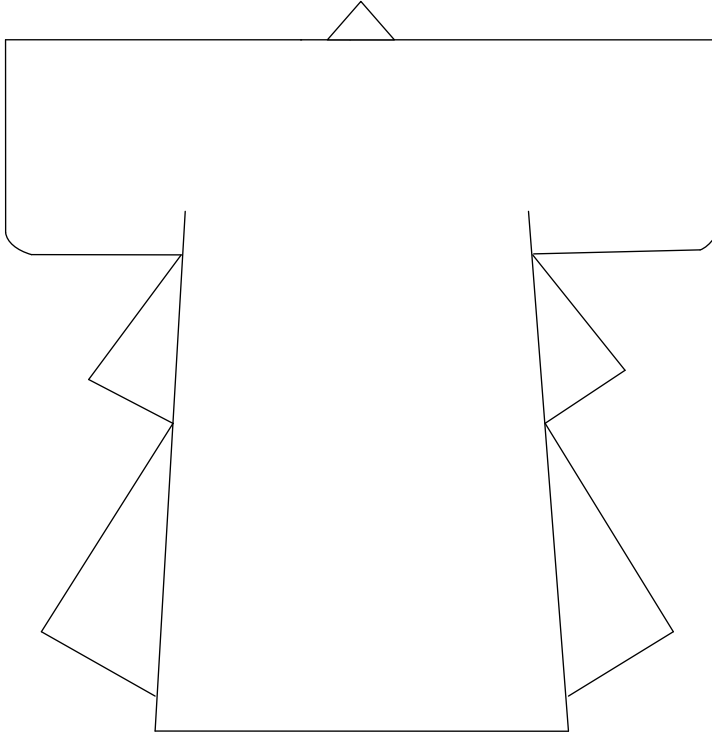
『美術資料』P.118・119 琳派

年	組	番
氏名		

1. 着物の圖案を考えよう

P.118・119 琳派の作品だけでなく、P.124・125の伊藤若沖の作品なども参考にしてください。

(参考作品：P.119 **6**「小袖 染分紗綾地雲漆取り楓模様」/P.124 **1**「群鶏図」/P.125 **2**「貝甲図」**3**「群魚図」)



2. あなたがデザインした、この着物に名前をつけてください。

3. 様々な作品に触れ、その後、自分で着物のデザインをしました。今の感想を書きましょう。